

想像界の生物相

創造界の化物僧

兵庫県立歴史博物館学芸課長 かがわ まさのぶ 香川 雅信



資料名 | 大入道山車の張子人形

標本番号 | 右から H0065362、H0065363

地域 | 日本、三重県

サイズ | 右から 高さ 29cm、19cm

◆◆四日市祭のオニウドウサン◆◆

三重県四日市の鎮守・諏訪神社の秋の祭礼「四日市祭」には、「オニウドウサン」とよばれる、「大入道」の山車が登場する。日本でもっとも大きなからくり人形の山車とされ、全高約九メートル、S字形に伸びる首の長さは二・七メートル。もともとは文化二（一八〇五）年に名古屋の人形師に作らせたものとされ、明治二（一八六九）年にクジラのヒゲを用いたバネによってS字形に首が伸びる仕掛けが加えられたという。

伝承によれば、むかし、醤油屋の土蔵に古狸が棲みつき、大入道に化けて人びとを脅かしたので、それに対抗するため大入道を模したからくり人形を作り、背の高さ比で狸を負かしてみごとと退散させたとされている。たとえていうならゴジラに対してメカゴジラを作って対抗したようなもので、いわば江戸時代の巨大ロボットである。

この四日市祭の大入道は郷土玩具の題材となっており、よく知られているのは簡単なからくりのある紙人形で、大入道の首が伸びたり、舌が伸びたり、目の表情が変わったりする。一方、民博の所蔵品になっっているのは張子製の立体的な模型で、

やはり首や舌が伸びたりする同様の仕掛けがある。張子の方は現在は製作されていないが、紙人形の方は今も四日市祭のみやげ物として祭礼のときに販売されている。

◆◆キャラクターとしての大入道◆◆

さて、この大入道の山車は、江戸時代の草双紙などに「見越し入道」の名前で登場する妖怪の姿そのままである。見越し入道は夜道にあらわれ、見上げれば見上げるほど背丈が伸びていくという妖怪で、「高入道」「高坊主」「次第高」「ノビアガリ」「ノリコシ」など地域によってさまざまな名称でよばれている。そして多くの場合、その正体は狸とされている。

だが、だんだんと背丈が伸びていく妖怪だった見越し入道は、草双紙のなかで首の長い入道姿の妖怪として描かれるようになる。背丈が伸びるとい時間的経過を含んだ怪異が絵ではあらわしづら

く、それに代わって与えられたのが「首が長い」という一目でわかる特徴だったので、つまり、首が長い大入道は、伝承をそのままメデイアによって創られたものではなく、いわばメデイアによって創られた一種のキャラクターなのである。おそらく大入道の山車が作られた当時、こんな姿の妖怪が現実存在するとは誰も思っていなかっただろう。それは祭りというイベントを盛り上げるための壮大な賑やかしだったに違いない。「想像界」ならぬ「創造界」の産物。造形化された妖怪について考える際には、この点に十分注意を払う必要があるのがある。



四日市祭の大入道山車（写真提供：四日市市）